

連載⑦ 新・反時代のパンセ — 不服従の理由 —

「脱真実」の時代

撮影／著者

なぜこれが「大賞」なのかしらないが、このクニの20

16年「流行語大賞」なるものは「神ってる」なんだそうさ。くらべるのは気がひけるけれど、「オックスフォード英語辞典(OED)」を編纂しているオックスフォード大出版局が「2016年の言葉」としてあげたのは、神ってるどころではない、「post-truth(ポスト・トゥルース)」という、唾然とするほかない形容詞である。直訳すれば、「真実後の……」「脱真実の……」。超訳するなら、「真実もへチマもありゃしない……」とでもなるうか。用法は「真実後の時代」「真実もへったくれもありゃしない政治」というぐあい。10年ほどまえからネット上ではつかわれていたというから、けっして新語と

はいえないのだが、英国の欧州連合(EU)離脱をめぐる国民投票や、ドナルド・トランプが勝利した米大統領選の前後に使用回数が増したために、「ポスト・トゥルース」はがぜん、時代を象徴する言葉となった。

総身から血がひいていくような話ではないか。真実(または事実)かどうかは、もはやものごとの尺度にはならず、人びとがもつばら好悪の感情やルサンチマン(怨恨)のみをゆうせんしているとしたら。政治的意思決定にあたり、言説とその根拠が真実かどうか検証する必要もなくなったとしたら。国民投票や選挙が、よりよい社会への選択手段ではなく、人びとの憂さばらしと意欲がえしの道具になりつつあるとしたら……気がめいる。

しかし、ここでよくかんがえてみよう。「脱真実」はなにもトランプがはじめて巻き起こした潮流ではない。かれが登場するはるか以前から、真実や真理は「ある」ものではなく、たんに「あるとされる」ものにするおかれてきた。性・民族・宗教などによる差別や偏見とそれにもとづく社会制度は改善すべきとするポリテイカル・コレクトネス(政治的妥当性)PCという常識も、お笑いネタにされるほどゆらいでいたのだった。

如上の現象とともに、自由・平等・博愛・民主主義といったこれまで普遍的価値(とされてきた徳目)にも、息をのむほど深い罅割れが生じている。移民と難民とテロの激増にともない、かつてジョルジョ・アガンベンが中国について形容した「超国家的な警察国家」は、いまや世界中にまんえんしている。そして、「その警察国家にあつては、国際法の諸規範が一つまた一つと暗黙のうちに廃止されていく」(アガンベン「人権の彼方に」政治哲学ノート)事態を、われわれは手を拱こまぬいてただぼうせんとながめていく。なにかとんでもないことがおきているのはまちがいない。そのなにかとは、これまで疑いも

しなかつた日常の常識や道理といったちやぶ台が、いきなりひっくり返される暴力に似ている。しかも、伝法なそのちやぶ台返しに拍手をおくり溜飲をさげる人びとが、マスメディアが世論調査をもとに予測した以上どころか、それよりはるかに多いという結果をどう受けとめればよいのか。

世界はげんざい反時計回りにうごいているのではないか、というのがわたしの実感である。すでに克服されたとばかりおもってきた独裁・強権政治や自民族中心主義、エスノセントリズム自国第一主義、メイルショールビズム男尊女卑、植民地主義、果ては封建主義までが息を吹きかえし、ファシズムがまたぞろ世界同時的にあたまをもたげてきているようだ。こうした「脱真実」の世界では、すべてが無遠慮、不作法で、あからさまであり、羞恥心が失せ、あられもなくなる。オスプレイの墜落にさいし、「感謝されるべきだ」とひらきなあってみせ、飛行を再開した沖繩米海兵隊トップの無礼、傲慢不遜ぶりはどうだろう。ニッポン防衛大臣のあの恭順ぶりはいったいなんだ。真実もへチマもありゃしないいま、せめて探すべきは、失われた怒りの導火線の在りかである。